

# 「あーね」考

## 二階堂 整

キーワード 方言 若者 福岡 あーね

### 1 はじめに

2013年度、ブログ「Ameba」を利用する女子中高生486名を対象に、「2013年に流行した言葉」に関するアンケート調査が実施された。その第3位が「あーね」であった（注1）。

彼女たちの間で流行している、うなずき・あいづちの意味で使用される「あーね」はどのような言葉であろうか。本稿では、この「あーね」が福岡の若者の方言であること、そして、福岡から九州他県に拡大していった珍しい事例であり、さらにその拡大には、それを支えるいくつかの要因があったことを述べていきたい。

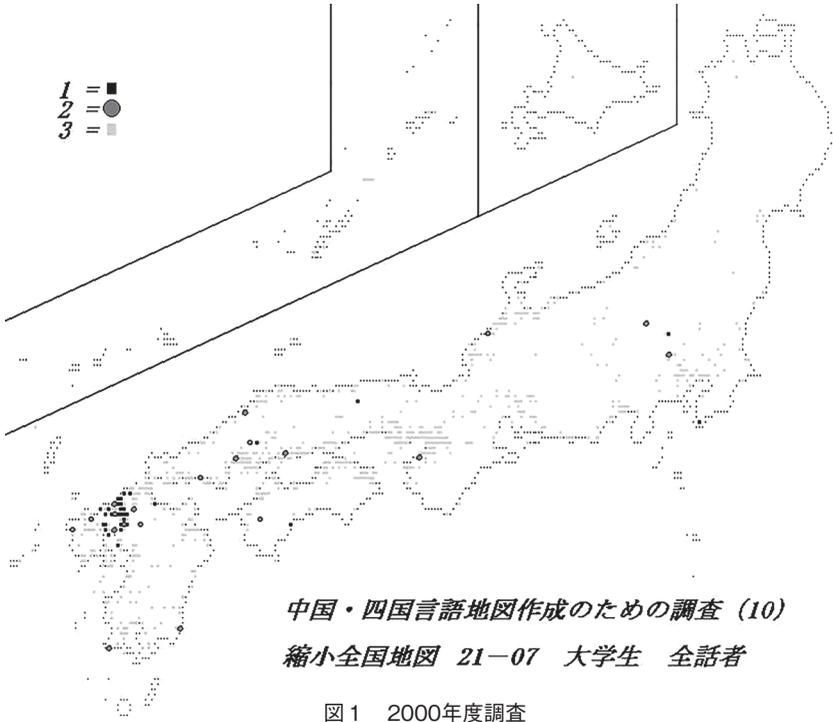
### 2 福岡の若者の方言「あーね」とその拡大

まず、2つの言語地図、図1・2を参照していただきたい。これは高橋顕志氏（群馬県立女子大）が各地の大学生に方言のアンケート調査をし、それを地図化したものである（注2）。大学生に出身中学（正確には中学校区）をたずね、その地元の中学の友人と話していた頃を思い出して回答してもらう方式をとっている。2つの地図とも、1（■）は「自分が使っていた」、2（●）は「自分は使わないが、地元の人使っていた」、3（■）は「地元では聞いたことがない」を意味する。

図1の地図は、2000年度の大学生への調査であることから、実際は、彼らが中学生だった1990年代半ば頃の状況を反映していると考えられる。図1によれば、明らかに福岡県（一部、佐賀県も含む）に記号1（■）「自分が使っていた」の集中した分布が見られる。1990年代半ば、「あーね」（あいづちの意味）は福岡の若者が使う方言だったと言えるのではないだろうか。図では福岡県内でも特に福岡市あたりにその分布の中心があるように見てとれる。一説に「あーね」は北九州発祥と聞くことがあるが、その根拠となる資料などはネットを含め、見当たらなかった。さらに、地図の分布結果を見ると北九州には、もっぱら記号3（■）は「地元では聞いたことがない」が見られ、この地を発祥の地とするには無理があるのではないと思われる。あるいは、北九州とは、北九州市でなく、北部九州の意味で使用しているのかもしれない。

同様の図2の2004年度調査では、この言葉が、明らかに福岡県から隣県へ拡大する様相が見てとれる。同じく大学生が中学のころを思い出しての回答であるから、2000年代に入って、「あーね」が勢力を拡大していったと思われる。先の2000年度の図1と比べると、福岡市を中心として、筑後地方から佐賀・熊本県への拡大がある。また、福岡市から北九州市へ広がり、大分県へも伝わっている。このように、4年程度で、若年層の間では、「あーね」が福岡県か

(2)



ら隣県へと使用が広がったのである。

注意すべき点は、九州以外に、群馬県や紀伊半島・四国沿岸にも記号1 (■)「自分が使っていた」の分布が見られるということである。これは福岡から飛び火して分布が広がったとは考えにくく、それぞれの地点で、たまたま同じ語が発生したと見るべきかと思われる。これは、「あーね」がどうやって発生したかにかかわる事柄である。おそらく、「ああ、そうだね(そうだよね)」などが縮まって「あーね」になったのではないかと考えられる。若者が言葉を短縮することはよくあることで、あいづちの意味で使用しているのであれば、それぞれの地点で同様の現象が起こっても不思議はないのである。

2007年度、福岡女学院大学と鹿児島県の大学で方言に関するアンケート調査を実施した(表1参照)。高校時を思い出し、回答してもらう方式である。結果は、福岡女学院大学の福岡県出身の68名中、64名・94%が「あーね」を使用していたと答えた。このように福岡県では、ほぼ全員が使用していた状況となった。同時に鹿児島国際大学と鹿児島県立大学の大学生へも調査を実施した(注3)。こちらは、鹿児島県出身の85名中、38名・44.7%が使っていたとの回答であった。図2の2004年度の調査では、鹿児島までの広がりは地図にほとんど見られなかったが、2007年度の調査では、鹿児島の大学生の半数近くが使っていたと回答しており、「あーね」のさらなる拡大が見てとれる。ただし、福岡と鹿児島ではまだ使用率に差が大きい。

(3)

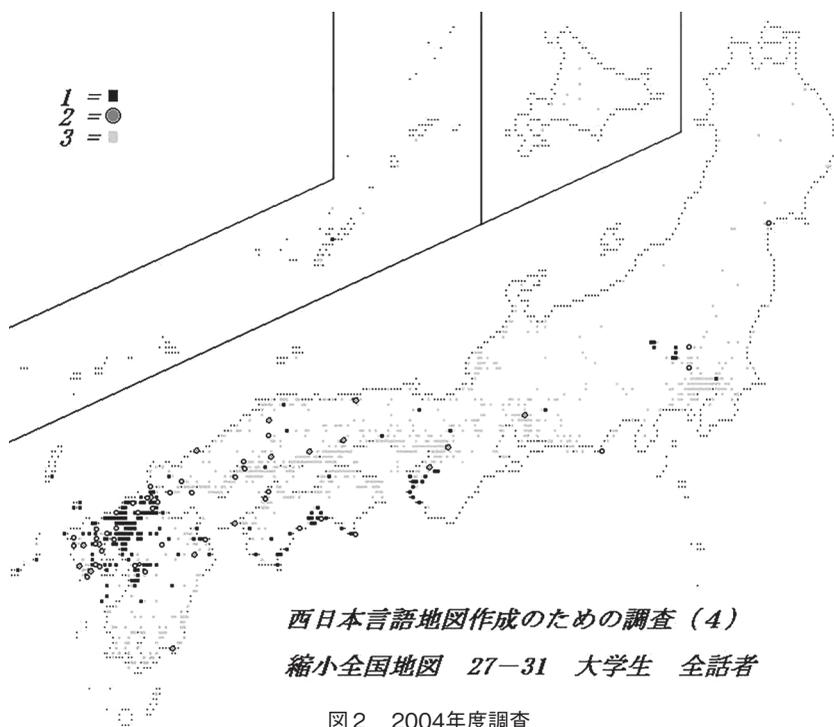


図2 2004年度調査

表1 同意をあらわすあいづちとして「あーね」という言い方をしていたか。

		福岡県		鹿児島県	
		人数	比率	人数	比率
1	使っていた	64	94%	38	44.7%
2	聞いたことがあった	4	6%	33	38.8%
3	聞いたことがなかった	0	0%	14	16.5%

2010年度、新幹線開通に合わせ、新幹線沿線沿いに福岡・熊本・鹿児島3県の方言調査を実施した(注4)。この調査では、地元の高校生と、その親世代にあたる4、50代の活躍層(一部、60代を含む)にアンケート調査を実施した。表2では3県をそれぞれの層で統合した人数と%をまとめてみた。この表から、高校生と活躍層には大きな使用率の差があり、明らかに「あーね」は若者が使用する言葉だと理解できる。先の図1の2001年度の調査結果が、「あーね」が福岡の若者の方言であると言える1つの証拠である。また、高校生の3県の比較から、「あーね」の使用率が福岡、熊本、鹿児島順に並んでいることがわかる。これは先の図1・2や表1の結果とも矛盾しない。いわば鉄道沿線沿いに「あーね」は伝わっているのである。さらに

(4)

4、50代の活躍層の数字も注目すべき点がある。男性よりも若干、女性の使用が勝る。中でも特に福岡の女性の使用率が目立つ。現在、福岡では、「あーね」の使用が、若者から上の世代に広がりつつある状況を示していると思われる。女性が男性よりも使用率が高いのは、おそらく、母親が子供の言葉を聞き、それを使用するようになってきているためと思われる。

2014年3月、NHKで「方言バラエティ あーね」という番組が放映された(注5)。その番組制作の中で、九州各県の高校生に「あーね」を使うか、アンケート調査が実施された(表3参照)。その結果、使用率は、沖縄では24%だったものの、それ以外の県ではすべて、80%を超えており、やはり福岡の使用がトップで96%であった。2014年3月の時点で「あーね」は九州の若者にまんべんなく浸透した状態であると言える。さらに細かくその使用率を見ていけば、福岡県を中心にして、鉄道沿線沿いにこの語が広がっている様子が見て取れる。使用率は、福岡から長崎本線沿いに、佐賀・長崎と並び、鹿児島本線沿いに熊本・鹿児島、日豊本線沿いに大分、宮崎と並んでいる。これは、鉄道のみで、言葉が広がるということではなく、(高速道なども含め)九州内の人々の主たる移動の経路・流れを反映していると考えられる。

表2 「あーね」を使うか

		回答数			使う					聞く			知らない									
		男	女	計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計									
層別	活躍層 計	179	157	336	6	3.4%	21	13.4%	27	8.0%	36	20.1%	46	29.3%	82	24.4%	137	76.5%	90	57.3%	227	67.6%
	高校生 計	162	225	387	145	89.5%	206	91.6%	351	90.7%	12	7.4%	13	5.8%	25	6.5%	5	3.1%	6	2.7%	11	2.8%
	福岡(活躍層)	68	73	141	5	7.4%	15	20.5%	20	14.2%	17	25.0%	25	34.2%	42	29.8%	46	67.6%	33	45.2%	79	56.0%
	熊本(活躍層)	71	58	129	1	1.4%	5	8.6%	6	4.7%	14	19.7%	18	31.0%	32	24.8%	56	78.9%	35	60.3%	91	70.5%
	鹿児島(活躍層)	40	26	66	0	0.0%	1	3.8%	1	1.5%	5	12.5%	3	11.5%	8	12.1%	35	87.5%	22	84.6%	57	86.4%
	福岡(高校生)	61	79	140	60	98.4%	72	91.1%	132	94.3%	1	1.6%	4	5.1%	5	3.6%	0	0.0%	3	3.8%	3	2.1%
	熊本(高校生)	49	86	135	46	93.9%	81	94.2%	127	94.1%	2	4.1%	3	3.5%	5	3.7%	1	2.0%	2	2.3%	3	2.2%
	鹿児島(高校生)	52	60	112	39	75.0%	53	88.3%	92	82.1%	9	17.3%	6	10.0%	15	13.4%	4	7.7%	1	1.7%	5	4.5%
	合計	341	382	723	151	44.3%	227	59.4%	378	52.3%	48	14.1%	59	15.4%	107	14.8%	142	41.6%	96	25.1%	238	32.9%

表3 「あーね」使うか

総計 男子 女子 1 自分が使う 2 地元で聞く 3 地元では使わない 自分が使う割合

福岡	47人	5	42	45	2	0	95.7%
佐賀	48人	3	45	44	4	0	91.7%
長崎	48人	6	42	39	9	0	81.3%
熊本	51人	7	44	47	4	0	92.2%
大分	34人	11	22	31	3	0	91.2%
宮崎	54人	12	42	46	7	1	85.2%
鹿児島	68人	14	53	59	8	1	86.8%
沖縄	62人	14	48	15	14	33	24.2%
全体	412人	72	338	326	51	35	79.1%

福岡から出発した「あーね」は日豊本線・鹿児島本線沿いに伝播していき、今、両本線から、宮崎に到達した状態と見るべきと思われる。

またこの番組の中で、熊本では、高校生が、先生に「あーですね」と返答するとの話があった。また宮崎では高校生が、「あーね」に対し「あーよ」と返すとの話もあった。これは、「あーね」が両県で浸透していることと、福岡からの伝播であることの二つを間接的に証明している。つまり、よく使われるようになっていいるからこそ、使用上、応用の事例が発生しているのであり、もともとの発生の地でないため、自由な形が生み出されたのである。事実、福岡では今も若者がさかんに「あーね」を使用するが、両県のような応用形式は生まれていない。ちょうど、寿司が世界でブームになると、外国では日本で考えられないような形・食材の寿司が生まれるが、本家の日本では、寿司はあくまで従来型の型を守った寿司であることに例えられると思われる。

さらに、この「あーね」の広がりには九州の方言現象でも非常に珍しい例である。九州で福岡の言葉が周辺県に大きな影響を与えたと思われる明確な事例は、過去から現在も含め、ほぼなかったと思われる。関西では大阪の言葉が周辺に影響を与えることがしばしば見られるが、九州では、そうした例がないように見受けられる。関西ならば、例えば、神戸（三宮）・大阪・京都は鉄道でつながり、それぞれの主要駅間は快速で2、30分、神戸から京都も1時間かからない移動距離である。一方、福岡と大分・熊本の主要駅間は在来線の特急を利用して2時間あまりもかかる（熊本は快速乗継の場合）。こうした、隣県との時間的距離の違いやそれともなう県ごとの違いが関西と大きく異なり、九州では、言葉が隣接県へ広がりにくい条件を持っていたといえる。

では、なぜ、この「あーね」は福岡県から隣県、そして九州全体の若者へと拡大していったのであろうか。それには、「あーね」のもつ語感とこの語の生まれた時期という背景があったと思われる。そのことについて、3・4章で述べていきたい。

### 3 「あーね」の使用実態

実際、若者は「あーね」をどう使っているのであろうか。2004年度調査の福岡の女子大学生同士の約1時間の談話の中からその一部を見ていく（注6）。アルバイトの話で、Aが結婚式場で働いている話題である。

- A 派遣会社で契約した方が、時給高いよ。
- B ああ、そうなんや。
- A うん、全然違うもん。
- B あーね。
- A 同じ仕事で、でも、なんか紹介料として、最初、600円とられるけど、時給的に200円ぐらい違うっちゃんね。
- B ふーん。
- A だけん、きついけどね。
- B ふーん。

(6)

- A でも、なんか、知識は増えるよ、食べ方とか  
B それは知っとーけん、大丈夫。  
A まじで。  
B うん。

この二人は福岡そだちの幼馴染で、自然なおしゃべりの資料である。それを見ると、1時間の談話の中で、この当時のあいづちで一番多いものは、当然、「うん」124例だが、他には、「まじ(で)」12例、「うそ」12例、「ほんと」3例、「あーね」3例などである。このように2004年頃は、「うそ」・「ほんと」が多用され、「あーね」はまだ少なかったのである。現在では、福岡の若者は「あーね」をよく使用する。大学生の日常会話を聞いても、頻繁に耳にする。では、なぜ、「うそ」・「まじ(で)」から「あーね」に交代していったのであろうか。これは、現代の若者の気質にかかわっていると思われる。最近の若者は、仲間と直接的なコミュニケーションをさける傾向がある。それは言葉の面でも、相手に対し、必要以上に気を遣った表現であったり、あいまいなぼかした表現を好んで使うことなどに現れている。「あーね」はこの傾向にぴったりあう言葉だった。「うそ」「まじ(で)」では、あまりに強い印象があり、軽いあいづちには使いにくい。そうした時に、「あーね」なら、それを解決でき、しかも、相手の言うことを聞いてはいるのだということを示せる。まさに現代の若者にとって、使いやすい言葉だったのである。そのぼかしたな表現が、現代の若者の気質に合い、福岡でさかんに使われるようになり、若者の気質に合うだけに九州の他の県の若者にも受け入れられ、九州全体へと広がっていったと考えたい。

#### 4 「あーね」の拡大時期

「あーね」の拡大には、若者好みの言葉という特性だけでなく、もう1つの幸運があったと思われる。それは、その時期が1990年代の後半からであったことである。

現在、九州では、福岡の一極集中が進んでいる。そうした事態は、1990年代からすでに起こっていた。1990年、福岡市の天神にイムズ・ソラリアという大きな商業施設ができた。このころから、週末、福岡に若者を中心に他県から多くの人がやってくるようになった。JRを使つての来福も多く、その線(長崎線)の列車の名前から「かもめ族」などの名前が生まれた(1991年頃)。1995年には高速道路が福岡・鹿児島間でつながった。JRだけでなく、各地から料金の安い高速バスを利用して、若者が福岡にやってくるようになった。1996年には今も多くの若者が訪れる人気の商業施設、キャナルシティが福岡市に開業した。福岡の魅力と交通網の発達にともない、福岡県外の九州の若者が福岡にやってきた。そして、そこで福岡の言葉にもふれる機会がふえていった。しかも福岡は若者にとって魅力ある地であるので、そこで話される福岡の言葉も肯定的に受けとめられる。結果として、「あーね」が九州の他県まで広がっていったのではないと思われる。

そのことを、西日本シティ銀行の調査レポート『若者の消費行動』(1996年度)から見ていく(注7)。この調査は、九州各県に勤務する30才迄の独身男女約1200名の回答をまとめたものである(福岡市及びその周辺の若者は対象になっていない)。調査では、彼らは福岡へ年に

(7)

平均7.3回行くとの結果がでている。次に、表4で、その調査レポートの抜粋を示す。福岡での買い物場所は先に述べた施設があがり、福岡へ行く理由として「店が多い」「友人がいる」「地元では満足できない」「交通の便が良くなり、気軽に行ける」があげられている。さらに福岡のイメージとして「活気がある」「楽しい」などが上位である。

表4 消費者動向調査レポート 『若者の消費行動』

調査対象

福岡での買い物場所は

	人数	%
北九州市	108	8.9
筑豊地区	92	7.6
筑後地区	100	8.3
佐賀県	123	10.2
長崎県	135	11.2
熊本県	192	16.0
大分県	166	13.8
宮崎県	120	10.0
鹿児島県	168	14.0

順位	男性	順位	女性
1位	天神地下街	1位	イムズ
2位	イムズ	2位	天神地下街
3位	天神コア	3位	ソラリア
4位	岩田屋	4位	岩田屋
5位	ソラリア	5位	天神コア

なぜ福岡に行くのか

1位	店がたくさんあるので
2位	友達がいるので
3位	地元のショッピングでは満足できないので
4位	交通の便が良くなって気軽に行けるので
5位	地元で遊ぶ所がないので

若者が感じる福岡のイメージは？

1位	活気がある
2位	楽しい
3位	変化がある
4位	若々しい
5位	新しい

第2章で、図1から1990年代半ば、福岡市を中心に「あーね」が広がり始めていたことを述べた。表4の調査から、1990年以降、九州各県の若者は福岡にやってくるようになり、福岡に肯定的なイメージをいただいていたことがわかる。表4は働く若者の場合であり、高校・大学生も含めれば、もっと多くの若者が福岡へやってきたと思われる。福岡での「あーね」の使用時期と、福岡が若者を引き付ける都市になっていった時期が重なりあい、「あーね」は九州の他県の若者へも浸透していったのである。

## 5 まとめ

九州では、1990年代、「あーね」が福岡の若者の間で使用されるようになったと思われる。この時点では、福岡の若者が使用する方言であった。その後、この言葉の語感などが現代の若者の気質に合っていたこと、ちょうど、この時期、福岡が発展し、九州内の移動が便利になったこととあいまって、「あーね」が福岡から九州各県へ鉄道沿線沿いに広がっていった。現在は、ほぼ九州全県の若者に浸透した状態と言える。九州ではある県から他の隣接県へ言葉が大

大きく広がる明確な例はほとんどなく、「あーね」はその数少ない例と言えるが、それは、先に説明したような背景（若者気質・福岡の発展）があったためと思われる。

「あーね」が2013年度の女子中高生の流行語ランキングに入る状態については、福岡が影響を与えた面があると思われる。しかし、その動きには、さらにもう1段階の説明が必要と思われる。それについては、今後、稿を改めて論じたい。

## (注)

- 1 サイバーエージェント プレスリリース 2013・11・26  
<http://www.cyberagent.co.jp/news/press/detail/id=8161?season=2013&category=ameba>
- 2 原図はカラーであるが、原稿の都合上、筆者が白黒で表示し、記号もそれに合わせて改変している。  
 図1 高橋顕志「中四国言語地図」2000年度  
<http://kenz.linguistic-atlas.org/chus/21/2107a8.htm>  
 図2 高橋顕志「西日本言語地図」2004年度  
<http://kenz.linguistic-atlas.org/nishi/27/a83127.htm>
- 3 二階堂2008「若年層に見る最近の福岡方言の動き」『方言研究の前衛』桂書房。鹿児島島の調査では鹿児島大学の太田氏の協力を得た。感謝する次第である。
- 4 科研基盤C「九州新幹線開通と市町村合併にともなう九州方言の変容」(代表 村上敬一)。調査では、以下の市役所・高校にお世話になった。記して、感謝申し上げる次第である。市役所では、鳥栖市・久留米市・大牟田市・荒尾市・熊本市・水俣市・八代市・川内市・出水市、高校では、城南高校・鳥栖高校・久留米高校・三池高校・荒尾高校・ルーテル学院高校・水俣高校・八代高校・川内高校・出水高校・玉龍高校である。なお、調査目的と対象語彙(あーね)をふまえ、便宜上、鳥栖市役所・鳥栖高校は福岡の扱いとした。また、県ごとの差はあるが、それぞれの県内での差は大きくないため、それぞれの市や高校は県ごとで統合した。
- 5 NHK「方言バラエティ あーね」(3月は九州・沖縄のみ。その後、5月に東北を除く全国放映)。  
<https://pid.nhk.or.jp/pid04/ProgramIntro/Show.do?pkey=501-20140328-21-53421>  
<http://www.nhk.or.jp/fukuoka/hougen/> (ともに2014・5・20時点)  
 アンケートの使用を許可くださったNHKに感謝する次第である。
- 6 科研基盤C「地域方言の談話アスペクトにおける「話者認知スケール」に関する記述的・理論的研究」(代表 二階堂整)
- 7 西日本シティ銀行 消費者動向調査レポート  
 平成8年度(1996)  
[http://www.ncbank.co.jp/chosa\\_report/shohisha\\_doko/h0808/index.html](http://www.ncbank.co.jp/chosa_report/shohisha_doko/h0808/index.html)

(にかいどう・ひとし)